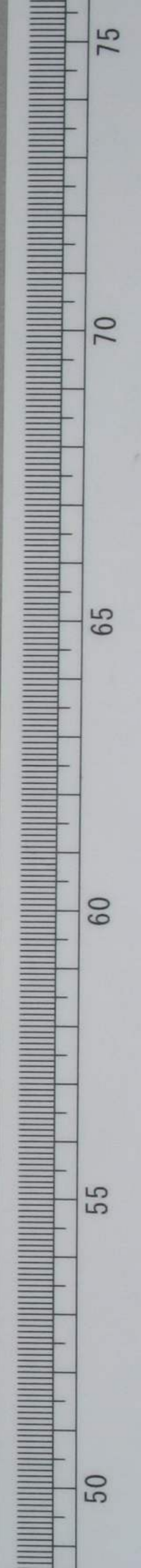
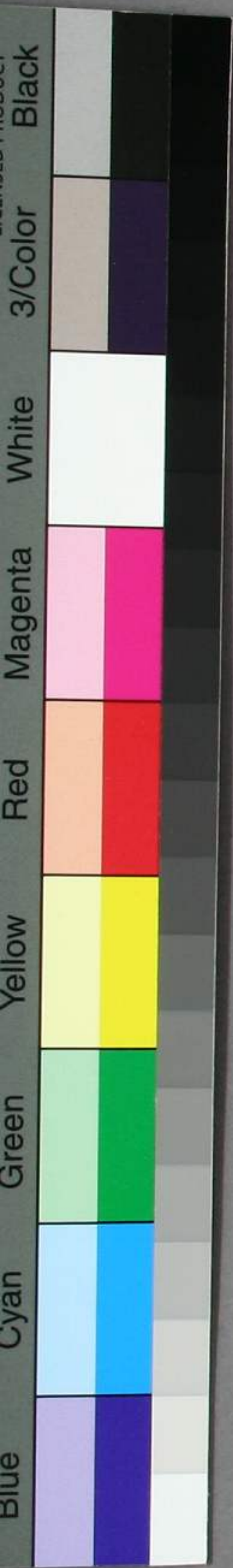


外山正一
矢田部良吉
井上哲次郎
全撰

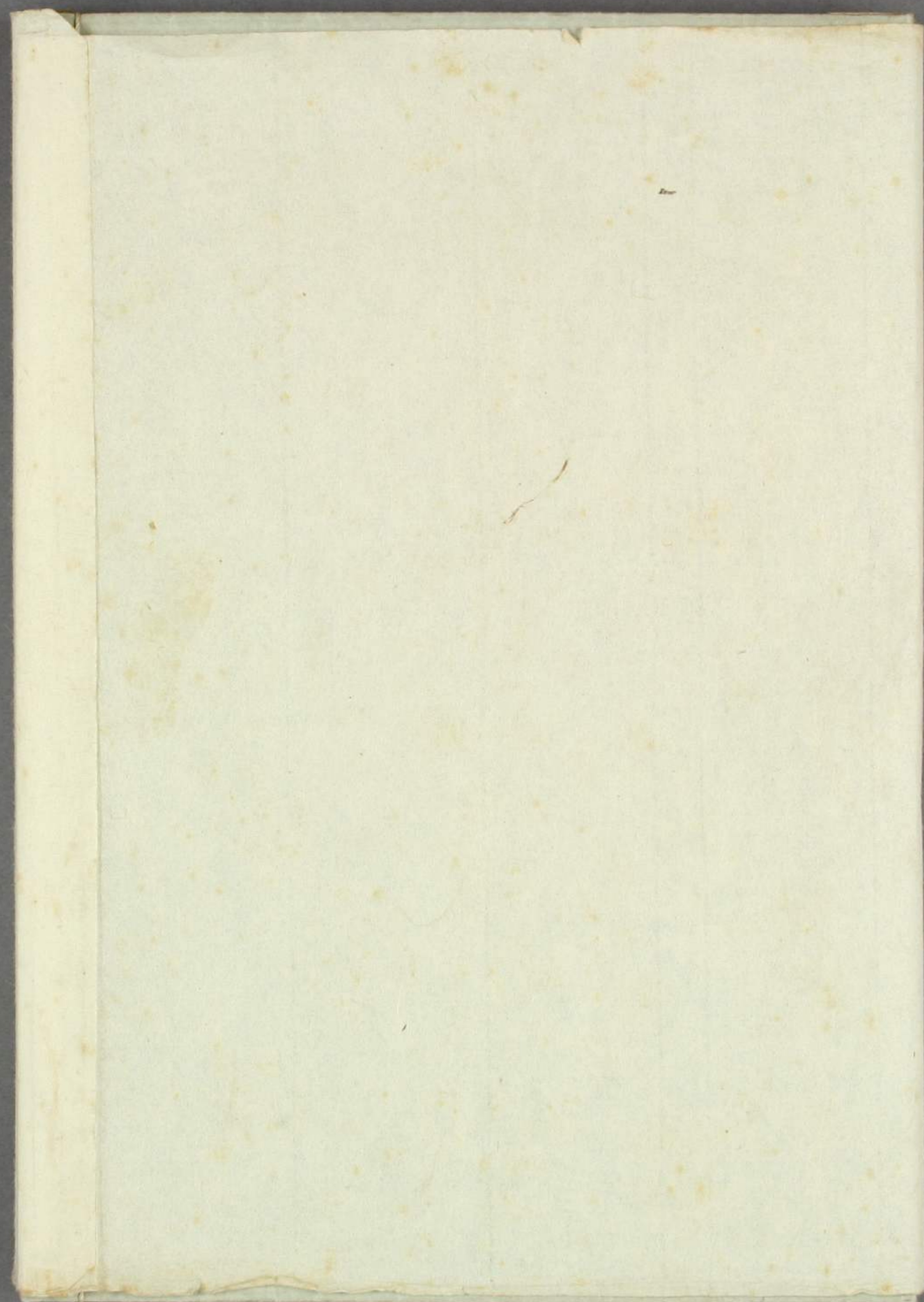
新體詩抄

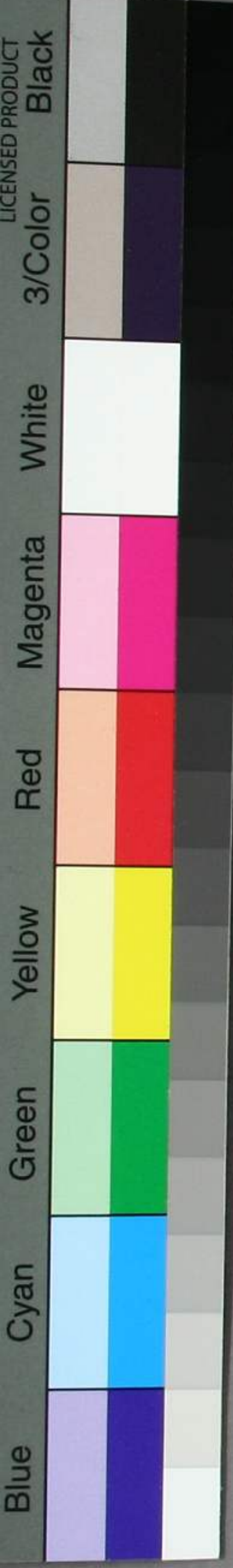
初編

明治十五年七月刊行









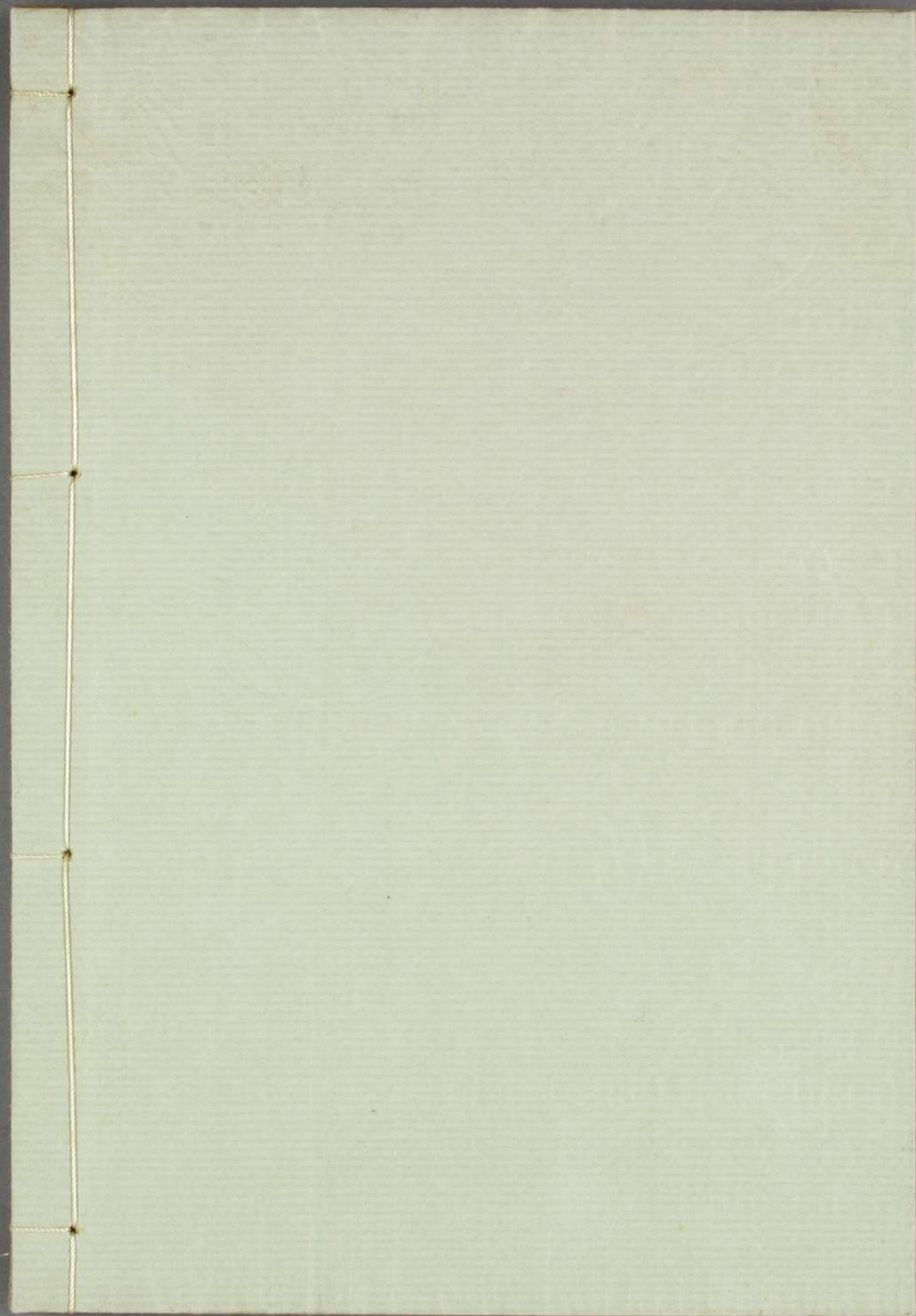
新體詩抄

初編

本間文庫
文庫 14
D 148
1









外山正一
天田部良吉
井上哲次郎
全撰

新體詩抄

初編

明治十五年七月刊行

新體詩抄序

程子曰。古人之詩。如今之歌曲。雖閭里童稚。皆習聞之。而知其說。故能興起。今雖老師宿儒。尙不能曉其義。况學者乎。是不得興於詩也。余讀此文。慨然而歎曰。今之歌曲。如古人之詩。而今人不知之。賤今之歌曲。而尙古人之詩。嗚呼亦惑矣。何不取今之歌曲乎。後讀傳記。貝原益軒有謂曰。我邦只可以唱歌。言其志述其情。不要作拙詩。以招詭癡符之誚。余又曰。誠如益軒氏所言也。我邦之人。可學和歌。不可學詩。詩雖今人之詩。而比諸和歌。則爲難解矣。何不學和歌乎。後入大學。學泰西之詩。其短者雖似我短歌。而其長者至幾十卷。非我長歌之所能企及也。且夫泰西之詩。隨世而變。故今之詩。用今之語。周到精緻。使人翫讀不倦。於是乎又曰。古之和歌。不足取也。何不作新體之詩乎。既而又思。是大業也。非學和漢古今之詩歌。決不可能。乃復學和漢古今之詩歌。咀英嚼華。

將以作新體詩。而未知其成與否也。屬者、山仙士與尙今居士。陸續作新體詩以示余。余受而讀之。其文雖交俗語。而平平坦坦。易讀易解。乃歎曰。有是哉。雖閭里童稚。於習聞之。何難之有。且作此詩。以發舒情志。則不亦勝於作唐詩以招詭擬符之誦乎。乃與二君屢相往來。改格正調。所作不爲少。因撰其佳者。名曰新體詩抄。是爲第一編。世之作詩歌者。其或謂以爲鄙俗乎。雖然。自古新體詩之興。多出於偶然。而不必俟百方鍊磨之勞也。果然則此書雖鄙俗。安知其不爲新體詩之始哉。

明治十五年五月七日

巽軒居士井上哲次郎撰

新體詩抄序

人常ニ善惡是非ノ差別ヲナスト雖モ一定不易ノ理アリテ然スルニ非ザルガ如シ其善ト爲レ惡ト爲ス所ハ其父祖ヨリ遺傳セル心性ト其處ル所ノ社會ヨリ受ケタル教育トニ由テ稍規準トナス可キモノナリ心中ニ生シ之ニ依テ判別スルノミ儒道ノ專ラ行ハル、邦ニ於テハ孔子ノ言フ所ナリ是ナリトシ「モルモン」教ノ專ラ行ハル、地ニ於テハスミス氏ノ言フ所ナリトス方今歐洲人ノ信仰スル耶蘇教ハ嘗テ猶太國ノ邪教ナリキ方今我邦人ノ信仰スル佛教ハ嘗テ印度ヨリ放逐セラレシモノナリ方今世ニ行ハル、光線波動ノ說萬物化醇ノ論ノ如キハ昔人ノ非ト爲レ、所ナリ明治ノ時代トナリテ某氏ノ爲メニ初メテ楠公内藏之助ノ忠義ハ權助ノ忠義ニ比ス可キヲ知リ某氏ノ爲メニ初メテ壓

制ハ自由ノ因ナルヲ知レリ世界ノ廣キ開化ノ種々ナル仍
 ホ人肉ヲ啖ヒ老者ヲ生ノマ、埋メテ是ト爲スノ國ナシト
 モ言フ可ラズ國ヲ異ニシ時ヲ異ニシ教育ヲ異ニシ觀念ノ
 聯合ヲ異ニスルモノトハ與ニ善惡是非ヲ語ル可ラズ故ニ
 歌ヲ曰ク

世ノ中ハオノガ心ノスガタナリ善キモ惡キモ外ニナク
 シテ

斯クハ述ルモノ、敢テ世道ノ衰頹ヲ憂ヒテ之ヲ挽回セン
 トスルガ如キ大事ヲ圖ルニ非ズ唯頃者同志一二名ト相謀
 リ我邦人ノ從來平常ノ語ヲ用ヒテ詩歌ヲ作ルヲ少ナキヲ
 嘆シ西洋ノ風ニ模倣シテ一種新体ノ詩ヲ作り出セリ但レ
 今成ル所ハ西詩ノ譯ニ係ルモノ多シ乃チ其數首ヲ集メテ
 一冊トナシ世ニ公ニス是レ我輩ノ稍心ニ嘉シトスル所ナ

レモ安ゾ知ラン世人ハ之ヲ奇怪千萬野鄙至極ノモノトナ
 シテ唾棄センヲ然レモ上ニ言フガ如ク是非善惡ハ一定
 ノ理ナク時代ノ新古開化ノ先後各人ノ信ズル所ニ隨テ異
 ナルモノナレバ我輩ノ詩モ亦今世ノ人ニ容レラレザルモ
 安ゾ知ラン後世ホーメルシーキスビールトマデニコソ至
 ラザレ或ハ大家ノ出ルアリテ其新流義ナルヲ善トシテ一
 層ノ工夫ヲ加ヘ更ニ人心ヲ感セシメ鬼神ヲ泣カシムルノ
 詩ヲ賦シ出スニ至ラザランヲ此編ヲ讀ム者須ク此ヲ諒
 シテ我輩ガ素志ノ苟且ナラザルヲ曉ルベシ敢テ卑見ヲ錄
 シテ以テ序言ニ代フト云爾

明治十五年四月

尙今居士矢田部良吉識

新體詩抄序

唐の横町の毛唐人が云ふ所の「大凡物不得其平則鳴、艸木之無聲、風撓之鳴、水之無聲、風蕩之鳴」云云「人之於言也亦然、不得已而後言、其歌也有思、其哭也有懷、凡出乎口而爲聲者、其皆有弗平者乎」と我邦をも長歌たの三十一文字迄の川柳たの支那流の詩たのと、様々の鳴方ありて、月を見ての鳴り、雪を見ての鳴り、花を見ての鳴り、別品を見ての鳴り、矢鱈お鳴りちらそとも、十分お鳴り盡そこと能ひぬ、何んとおれば、古來長歌を以て鳴れるものかきおあらねども、この最と稀あることおして、殊お近世お至りては、長歌お全く地を拂へる有様おて事物お感動せられたる時の鳴方お皆三十一文字や川柳や簡短かる唐詩と出掛け實お手輕かる鳴方おればなり、蓋お其鳴方の斯く簡短かるを以て見れば、其内おある思想

とても又極めて簡短なるものたるに疑なし、甚だ無禮なる
申分かの知らねども三十一文字や川柳等の如き鳴方にて
能く鳴り盡すことの出来る思想に、線香烟花か流星位の思
は過ぎるべし、少しく連続したる思想、内はありて、鳴らんと
するときは固より斯く簡短なる鳴方にて満足するものよ
あらむ又唐風の詩を作り稍長くと鳴るもの、近來世間お勘
しとせざれども抑も詩と云ふもの、其意味も固より大切
かれども、其音調の良否も、又甚だ大切なり、夫れ變則者流の
漢學者の唐詩を作るや、固より平仄てふものありて其詩た
る一通りの、音律お叶ひたること、萬々疑おしと雖も、芥子
坊主をして、之を呼鳴らおめたらんお果して心地よき音
調のものあるか、將た破鍋を雷木よて叩くが如きものある
もの、未だ知るべからむ、蓋し日本人お取りて、支那流の詩

の、恰も瘧の手真似、若くは操人形の手踊の如きものあり、瘧
は生れおして、瘧の真似をおし、人と生れて、人形の真似をお
るもの、又憫おさるべけんや、そこで我等の連続したる思想、
内おある譯もあらむ心地よき音調を以て能く鳴ること
の出来るものおあらねども、全く三十一文字や堅くるこ
き唐詩の出来ざる悔おさす、何か一つと腕組おたれど、やそ
り古來の長歌流新体おど、名を付けるに付けたが、矢張自
分免許の鼻高で、あたら西詩を惜けおく、譯も分おぬ文句以
て、譯したものと、尙ほ拙おをのが、ものせる長文句、能く見れ
る、

新体と名こそ新お聞ゆれど、

やそり古體の大佛の法螺

法螺と知りつゝ、古を、我よりおさん下心、笑止とこそお云ふ

べけれ、法螺の我より始まれる、ものああらぬのまだしもぞ
人のおさざることゝてり、假令へ法螺でもおさぞかし、唯々
人は異なる人の鳴らんとする時の、忘れた雅言や唐國
の、四角四面の字を以て、詩文の才を表はれども、我等が組に至
りてり、新古雅俗の區別なく、和漢西洋をちやまぜて、人は分
ゐるが專一と、人は分かる自分極め、易く書くのが一、の能
見識高き人たちの、可咲いおものと笑ひ々笑へ、諺は云ふ、夢
食ふ虫も好きく、なれば、多くの人の其中より、自分極の我
等の美譽を賛成する馬鹿おしとせき、安んぞ知らん我等の
ちんぷんかんの寢言とても遂は今日唐詩の如く人よ
もてはやさるゝ、ことおさを、穴賢、

明治十五年五月

山仙士外山正一識

凡例

- 一 均シク是レ志ヲ言フナリ、而シテ支那ニテハ之ヲ詩ト云
ヒ、本邦ニテハ之ヲ歌ト云ヒ、未ダ歌ト詩トヲ總稱スルノ
名アルヲ聞カズ、此書ニ載スル所ハ、詩ニアラス、歌ニアラ
ス、而シテ之ヲ詩ト云フハ、泰西ノ「ポエトリ」ト云フ語即
チ歌ト詩トヲ總稱スルノ名ニ當ツルノミ、古ヨリイハユ
ル詩ニアラザルナリ、
- 一 和歌ノ長キ者ハ、其体或ハ五七、或ハ七五ナリ、而シテ此書
ニ載スル所モ亦七五ナリ、七五ハ七五ト雖モ、古ノ法則ニ
拘ハル者ニアラス、且ツ夫レ此外種々ノ新体ヲ求メント
欲ス、故ニ之ヲ新体ト稱スルナリ、
- 一 此書中ノ詩歌皆句ト節トヲ分ナテ書キタルハ、西洋ノ詩
集ノ例ニ倣ヘルナリ

一 詩歌ノ初メニ往々序言ヲ附スルハ嘗テ新聞雜誌ノ類ニ
 掲ケタル者ニテ、其事頗ル詩學ニ關係アルヲ以テ復々之
 ナ此ニ掲ケ、敢テ其煩ヲ厭ハス、看官幸ニ之ヲ諒セヨ、
 明治十五年五月
 編者識

目次

ブルウムフールド氏兵士歸郷の詩(山仙士)	一葉
カムプベル氏英國海軍の詩(尚今居士)	四葉
テニソン氏輕騎隊進撃ノ詩(山仙士)	五葉
グレイ氏墳上感懷の詩(尚今居士)	七葉
ロングフェルロー氏人生の詩(山仙士)	十三葉
玉の緒の歌(巽軒居士)	十五葉
テニソン氏船將の詩(尚今居士)	十七葉
抜刀隊の詩(山仙士)	十九葉
勸學の歌(尚今居士)	二十二葉
ナヤールス、キングスレー氏悲歌(山仙士)	二十三葉
鎌倉の大佛お詣で、感あり(尚今居士)	二十六葉
高僧ウルゼーの詩(山仙士)	二十八葉

シャルル・ドレアン氏春の詩(尙今居士)

三十葉

社會學の原理を題す(山仙士)

三十一葉

ロングフェロー氏兒童の詩(尙今居士)

三十四葉

シェーキスピール氏ヘンリー第四世中の一段

三十六葉

(山仙士)

シェイクスピール氏ハムレット中の一段(尙今居士)

三十八葉

シェーキスピール氏ハムレット中の一段(山仙士)

四十葉

春夏秋冬の詩(尙今居士)

四十一葉

新體詩抄初編

外山正一

矢田部良吉 全撰

井上哲次郎

ブルウムフキールド氏兵士歸郷の詩

(山仙士)

涼しき風は吹かれは、ありし昔の我父の
 椅子はもたれてあるさまの 實は心地克くありはける
 その座をたぬと腰掛の 堅く作れる臂掛は
 よそおの昔荒く刻みのこせる我名前
 猶ありくとみゆるかり 柱は掛と古時計
 元はかひぬ其音色 聞ききて轟く我胸は

満る思の猶切は
忘れんとして忘られぬ
後よ掛し古畧歴
ひらくくと誘われて
嵐あ逢ふて翻へる
一枚つゝあ又下へ
數も合せて二十年
暮せる年の數取りぞ
來たる一羽の知更鳥の
我をつつと不審顔
はまかむ如く見へあけり
嗚呼老ひたりや老ひあけり
昔の友ああらぬかと

そりさく如く堪がぬ
嗟難は堪へぬ其時あ
忽ち寄せるそよ風あ
上るは是ぞ陣前
小幡とまその見ゆるかれ
下りて落るその紙の
故郷をはかれ遠國あ
折しを家の入口へ
人よ狎れたる鳥あれど
怖づるが如く且つゝ又
口よ云ぬぬどそのふり
それあ居るをる武士の
尋ねる様よ見へまけり

斯く心中あ彼是と
眺ああがめつくくと
苔の席を眺むれば
其美さあてやろさ
是も誰がわざ稚子の
敷て樂むものありと
思ひの更よいやまさり
年をも日をも打忘れ
わつと斗あ啼きまけり
あゝ我ががら愚まじと
過ぎ越し方をさまくと
屏しく又口惜しく
軍の神をのゝ忘れり

物を思へる其間
窓の隈よ織あせる
緑の色の青くと
又と類ああらなくあ
あしたゆふべの手をさみよ
推量それはいとゞなほ
脚のろろあ塞りて
前後も知らせ立上り
稍時ありて心付き
再び椅子よつくくと
思ひつゝけて按せられ
意の髪も逆立ちて
名譽の淵あ落ち入りて

可^{おたの}惜勇士の失せぬるハ
殺^{ころ}傷放火分捕の
今更思ひめくらせハ
我身を守るたりとぞと
我身の罪をりさねたる
恨^{うら}いといといやまされ
二人の影が見ゆるある
あらとの老と見受けたれ
計らまめぐり逢ふ坂や
せき来る涙關あへぞ
啼^な泣きまづ泣きあける
目元涼しき小女子ハ
これナンセーと手を取りて

實^{まこと}は傷敷き事ぞかし
其有様を熟くくと
あら恐ろしやむとたらし
頼み頼める^{たす}劍こそ
仇と思へばなほさらあ
聲するあたをうちみれば
此影ころハ^ま稚子と
やがて入り来る我父ハ
我子の顔を一目見て
我を抱きて老いの身の
るが傍^{そば}はイめる
腰打屈め老人ハ
口を合ハすもあまる愛

こゝあ居やるハやうくと
ろかたの伯父のチーレぞと
忘らをの如き指をあけ
ると打弾きぐわんぜかく
嗚呼我あが^あ愚かり
繰返へそころ無益かれ
此老卒^まぞ幸多き
心^{こゝろ}は掛る雲もあし

イスパニヤより歸國せる
云へば女ハ近寄りて
いとゞ曇れる老の眼を
笑ふ姿ハ可愛ゆらし
身の上はか^あ斯く長く
るれは付きても鬼^{おに}は角ハ
浮世の中ハ今ハまた

カムプベル氏英國海軍の詩

尙今居士

イギリス國の海岸を 固く守れる水兵よ
一千年のろの間 汝が建つる大旗は
戦争のみり嵐をも 支へ得たれば此後を
敵を受くともたゆみなく 勇氣の限りひるがへせ
軍烈しくあらばあれ 嵐も強く吹かば吹け
立ちくる海の浪間より 汝が祖先あらはれて
汝を援けたさふべし 蓋し祖先の軍艦の
其甲板にてがらの場 大海原の其墓場
大子ルソンやプレーキの 死し處に人志のお
軍烈しくあらばあれ 嵐も強く吹かば吹け

四方海あるブリタニヤ
山とたちくる波とても
慣れて我家お異からせ
船より放ち轟おし
軍烈しくあらばあれ

とりども城も用のかし
千尋のろこの淵とても
いかづちおせる大砲と
波をわけつゝ進み行く
嵐も強く吹おら吹け

國の光とたてし旗
危難も都て解け去りて
其時汝つものゝ
歌お唱ひて悦びて
烈しき軍すみし時

益光り輝きて
太平の日よとどるらん
いさほし譽て諸人が
安樂限りおるらん
強き嵐のやみし時

左の詩の一千八百五十四年英佛の兩國土耳其を援けて
魯西亞と兵端を開き遂に高名なるクライミヤの戦争と
なり此間數多の合戦此處彼處に在りたる中最有名なる
ものゝ同年六月廿五日バラクラバの戦争にて英國の輕
騎隊六百騎が目餘る敵の大軍中へ乗り込み古今無双
の手柄を顯はしたれども惜い哉衆寡素より敵に難く其
大概に討死し或に擒よせられ無難に歸陣したる者甚僅
よて有きと當時英國に有名なる詩人テニソン氏が其進
撃の有様を吟咏したる者よして何國人に限り苟も英
語を解ゆるもの此詩を暗誦せざるなしといふ

山仙士

テニソン氏輕騎隊進撃ノ詩

其一

一里半なり一里半 並ひて進む一里半
死地は乗り入る六百騎 將の掛れの令下は
士卒たる身の身を以て 譚を糾は分ならん
答をかにも分ならんぞ 此れ命これに従ひて
死ぬるの外はあらざらん 死地は乗り入る六百騎

其二

右を望めば大筒ぞ 前も左りも又筒ぞ
共は打出は砲聲の 天は轟くいろつちの
響の如く凄まじくや 彈丸雨飛の間あも
猛り立てぞ進むなる 死地はころ入れ鱈の口
勇んで乗り入る六百騎

其三

抜けば玉ちるやいばをば 皆もろ共は振あけて
きくくくと輝けり 敵陣近く乗り掛けて
大砲方をあて切りは 最と目冷とき働まぞ
煙の中は飛込みて 烈しく陣を破るあり
太刀の早業見ことなり 敵の軍勢あぶくと
遂あさふる事ならん むらくそつとむらくづれ
馬の頭ぞ立直す 以前は進みし六百騎
残るはいとわづりなり

其四

右を望めば大筒ぞ 左りも後も又筒ぞ
共は打出す砲聲の 天は轟くいろつちぞ
彈丸雨飛の其中は 從横むとん切り靡く
死地より出て乗り歸へは 鱈の口より脱れ出て
歸るは元の一里半 六百人の其中にて

残るのいとわづらなり

其五

あゝ勇まじきものゝふの
手柄の永く傳へらん
とる年あまた重りて
頭よ霜を戴きて
六百人の豪傑が
るのふる事を語りあは

よよ香しき其譽
今のをさなで生立ちて
腰の梓の弓とかり
孫ひこやしやを多き時
敵の陳へと乗り入れる
未代まじも名は朽ちじ

我邦ニ於テハ西洋ノ詩歌ヲ翻譯スル人甚ダ少ナシ蓋シ
其趣向ノ我詩歌ト同シカラザルガ爲メナルベシ又翻譯
譯スル人アルモ之ヲ支那流ノ詩ニ模擬スルガ故ニ初學
ノ輩ハ解スルヲ能ハス余之ヲ慨スル久シ以爲ク西洋人
ハ其學術極メテ巧ニシテ精粗到ラザル所ナシ其詩歌ニ
於テモ亦之ト均ク能ク景色ヲ模寫シ人情ヲ穿テ讚賞ス
可キモノ多シ且ツ其句法萬種ニシテ韻ヲ踏ムモノアリ
踏マザルモノアリ緩漫ナルモノアリ疾急ナルモノアリ
其語勢ノ變化殆ド捉摸ス可ラズ而シテ其言語ハ皆ナ平
常用フル所ノモノヲ以テシ敢テ他國ノ語ヲ借ラズ又千
年モ前ニ用ヒシ古語ヲ援カズ故ニ三尺ノ童子ト雖モ苟
クモ其國語ヲ知ルモノハ詩歌ヲ解スルヲ得ベシ加之西
洋人ハ短キ詩歌ヲ好マザルニハ非レドモ亦長篇ヲ尙ビ

あさばらけよぞありねれば
冥土の人の眠をば
るまびすしくありつれど
覺はことこそありけれ

死したる人のほかあさよ
妻のよあべも誰が爲めぞ
爺の歸りをよるこひて
身を暖むる爐火も
愛るわらべがたことよ
小膝よそがることよあり

皆てこの世に居し時の
山もはたげも其くはよ
繁れる森も其斧よ
夢も小夢も其録よ
手荒き馬も其むちよ
まうせて君が儘ありき

功名とても浮雲の
この古人の世の益と
過るが如きものかれは
ほねをりするも不運をも

わびしき妻子の暮しをも
笑ふべきありあらむらし

富貴門閥のみあらむ
浮世の榮利多けれど
草葉の露もたぬかなり
みめうつくしきをとめこと
いつか無常の風ふりば
黄泉よ入るの外ぞあき

苔あうもれし古人の
あぬりまばゆき屋の内
樂器の音を聞せとも
墓場の上よ寺をたて
頌歌の聲よ合はるる
身の不徳とを思ひそよ

ひつぎ肖像美を盡し
ひとたび絶えし玉の緒と
へつらふ人のほめ言と
人の尊敬多くとも
つあぎとむべき術あり
長き眠り覺はすト

考へみれば廢れたる
世はすぐれたる量ありて
詩文の才も多けれど
此古蹟の古人も
國を治むる徳を具し
あらはれせして失せける歎

學びの海に廣けれど
心の性せいの賢けんきも
世のはされをば聞かせして
わたる船路を知らざれば
身の賤せんしくて貧ひんかれば
空しく鄙びんお終りけり

深き氷底こおりぞこ求むれば
高き峯たかねをば尋ぬれば
千代の八千代の昔より
輝く珠も有るぞか
かをる木草の多けれど
人は知られて過ぎおけり

實じつは此墓かぶつお埋もれて
詩の拙せつくもミルトンミルトンお
クロムエルクロムエルも比ぶべき
國は軍を擧あげとも
人のかねやあるからん

議院の議士を服さしめ
國の安危を身みお委ね
此等のわざわざおしあべて
人のおととも外ほかは見る
高き譽望きよぼうを民は得る
古人何ぞあづからん

恵みのひぬく及ばねど
不徳もいとゞ少すくおしや
民をおやめて利りをおみ
又常々のふるまひお
人を殺して王となり
夢はもみまトさることお

まことをかくはら言お
恥るを忍ぶ心の苦

且つ巧ある詩文もて 富貴お媚る世のあらひ
是の都の弊おれど 未だ此地よ及ぼさず

此處よ生れて此處よ死お 都の春を知らされハ
其身の淨き蓮の花 思ひの清める秋の月
實よ厭ふべき世の塵の 心よ染みしことぞあき

されど收めしあきがらの くるくの爲と側近く
建し石碑の今もあり 文の拙く彫りさまハ
醜しとてもたび人の 憐を争で惹かさらん

碑面よえられる名よ年齢よ 記し、文字の拙くも
記念の功の有ぞかし 又有がたき經文の

文句を引きてえりたるハ 人お無常を論を爲め

蓋し此世よ生れ來て 程かく死るその時お
別れの惜しきこともかく 浮世の花の榮をバ
心の外よ打捨て、 去り行く人ハあゝるべし

眼の光り止むときハ 戀しゝるらん身のやから
たましい体を去るときハ いたく慕はん妻子ども
たとひ焼くとも埋むとも 人の思ひの消えりせト

偕又此よ古人の いられハ書けど余とても
いつか歸らぬ旅おたち 過ぎ行く後ハ世の人の
如何せしやと思ひやり たづぬることも有るらん

しらん時ハ此さとの頭カ霜カを重ねたる
老人斯くぞ曰ふからん我儕ハ彼れが朝早く
昇る旭を見バやとて岡カ登るを常カ見き

又彼處カある川はたの枝伸び垂れ山毛櫛カの木
わだかまりある根の側カ身を横たへて畫いこひ
流るゝ水カ打臨み其常カかきをかこちげん

又彼處カある常葉木の本立の下カさまよひて
かしら傾けうづを組み知る人かさの歎カりさ
とゞかぬ戀の口惜カしさ世のうさ杯をかこちげん

さるよひと日ハ彼の人と慣れ岡カも樹陰も
絶て見ることあかりけり其翌朝カあかりぬれど
野カも森も川邊カも身をバ現ハれことぞあき

又其次の朝ぼらけ屍送る歌きげば
まさしく彼の爲めかりき君ハ字を知る人なれば
彼の山櫃カの陰カもある碑文を讀みて識りたまへ

碑文

土カ枕カとこの下カあ身をかくしたる若人カは
富貴名利もまだ知らぬ學カひの道も暗カげれど
あはれ此世を打捨てあカの世の人とかりあけり

仁惠深き人かれは 天も憫み報いけり
憂き人見れば涙ぐむ (外は詮をばかき故也)
ひとりの友のありしとよ (外は望みはあはるらん)
これより外は此人の 善し惡し共あか不深く
尋るとても詮のなれ たましひ既あ天に歸し
後の望みをいだしつゝ 神あまぢかく侍るあり

ロングフェルロー氏人生の詩、山仙士

ろも靈魂の眠るの死といふへきものぞかし
人の一生夢かりと あはれかふとどうあふあよ
眠らばや夢の見ぬものぞ 此世の事は何事も
夢とおもへどさああらせ

人の一生夢ならせ 最とたしあかる事ぞかし
人の終の墓かくも 墓よりづまるものかたせ
土より來り又土あ 歸ると云ふは肉體ぞ
りりや靈魂の事からせ

此世に在りて樂むも 又苦しむも固と人の

世はある趣意ああらざらん
日毎くは怠らざり
功を立てねばから忍ぞよ

生るの役あ立つ為ぞ
今日ハ今日丈け一日の

光陰實は箭の如く
心の如何は猛く共
送葬大鼓打つ脚の
最ともあられあひゞくらん

藝道最とも易らざり
墓あかく進む葬禮の
音止めされたる大鼓の音

此世の中ハ戦争ぞ
人ハ生れた甲斐もなく
あゆむ羊や牛たるな
功名手柄をせべきぞ

其戦争の中あ居て
人あ使られ道はれつゝ
人ハ劣らざり憤發し

如何ハ樂しくおもふ共
如何あうれしくありつとも
働くべきハ現在ぞ
胸の心と天の神

未來ハあておまべりふぞ
過去ハむりしハ過し事
其働を見る者ハ

豪傑輩の一生と
生きて甲斐なきものかたき
稀かる譽得るからば
永く傳へて残るらん

熟ら思ひめぐらせば
人ハ勝れし手柄して
名ハ香しく後の世ハ

其香しき名を聞かば
艱苦辛苦の浪風ハ
助け船さへあらぬ身を

社會の海ハ乗り出して
吹き廻りされて破船して
氣を取り直し憤發し

功名遂ぐる者あらん

されば人々怠たるな
運命如何よつたなきも
たゆまき止まき自若とし
勤め働くをせよ

暫時も猶豫をるあかれ
心を落ををなかれ
功名手柄なれつゝも

余蚤ニ新體ノ詩ヲ作ラント欲セシト雖モ、其容易ノ業ナ
ラザルヲ慮リ、先ツ和漢古今ノ詩歌文章ヲ學ビ、ソレヨリ
漸次ニ新體ノ詩ヲ作ルノ路ヲ爲サントシケルニ、一日尙
今居士ハムレットノ譯詩ヲ示サル、其文俗語ヲ交フト雖
モ、反リテ古歌ヤ漢詩ノ解シガタキニ勝ル、因リテ余之ヲ
歎賞シテ學藝雜誌第六號ニ載ス、次イテ、山仙士モ亦ハ
ムレット并ニカーザナル、ウルシー等ノ作アリ、是ニ於テ
余思フニ古今ヲ問ハズ、東西ヲ論セズ、凡ソ新體ノ詩ノ流
行スルハ、大抵偶然ニ出ヅル者ニテ、必ズシモ百方鍊磨ノ
勞ヲ俟タザルナリ、サレバ尙今居士、山仙士ノ作ル所モ
新體ノ詩ノ始メナルヤモ知ルベカラズ、乃チ自カラロン
グフロー氏ノ玉の緒の歌ヲ譯シ、二君ヲシテ新體ノ詩ヲ
創造スルノ功ヲ專ラニセシメザラント欲ス、余ノ作ル所

略二君ニ同シ、但二君ハ韻ヲ蹈マズ余ハ試ニ韻ヲ蹈ム、是レ其差ナリ、或ル人余ガ譯詩ヲ見テ、大ニ笑フ、蓋シ或ル人ノ如キハ文學ノ盛衰興廢スル所以ヲ知ラザル者ニテ、深ク尤ムルニ足ラズ、夫レ明治ノ歌ハ、明治ノ歌ナルベシ、古歌ナルベカラズ、日本ノ詩ハ日本ノ詩ナルベシ、漢詩ナルベカラズ、是レ新體ノ詩ノ作ル所以ナリ、若シ夫レ押韻ノ法、用語ノ格等ハ、次第ニ改良スベキノミ、一時ニ爲スベカラズ、看官幸ニ之ヲ諒察セヨ、

巽軒居士識

玉の緒の歌(一名人生の歌)

眠むる心ハ死ねるかり 見ゆる形ハおほろかり
あすをも知らね我命 あればかき夢ろり

なごゝあられふいふの悪し

我命こそまことかれ 我命こそたごかなれ
墓の終りの場所からぞ 人の塵よて又散ると
いふのからだのうへのこと

人の願ハ喜か 人の願ハ悲り
人の願ハこれからぞ 唯怠たらせはたごきて
今日よりまさる明日をまて

業ハ久しく時ハ馳す 強き脚たも亦たえぞ
鼓の如く撃ち續け 一日くふちろくある
死出の旅をぞはやすある

争ひ多き世の中お
かりてまをく進むべし
率かる、牛となる勿れ

此身を寄せて先鞭お
言かき啞とある勿れ

如何も未来の樂しきも
共よ之を捨ておきて
はたらくべきの今日をあり

如何も空しき過去あるも
われを忘れぬ神を知り

すぐれたる人世も多し
勉め勵まば斯くおらん
長く残さん此名をば

われとても人相同ト
ゆめ怠らぬ勉めおら

海より荒き世の中お
獨漂ふ我友の
我名を聞きて進まかん

舟失ひて波の間お
我名を聞きて勇まかん

さすれば人の氣を張りて
如何なる運も事とせぬ
樂あるぞはたけよ

事業ばかりお心して
高きよ至れ馳せゆけよ

テニソン氏船將の詩(英國海軍の古譚)

尙今居士

暴威を以て下を馭は 人ハ此世の鬼あるぞ
 天地も容れぬ罪あるよ 其過ちの深きこと
 阿鼻の地獄も及ハトあ 若シや今シも壓制を
 嗜まんものゝあるからバ わが此歌をよく聽て
 其身を深くいましめよ 曾て勇々しき武士の
 將たる船の乗組ハ 自由の空氣吸ひかれシ
 英吉利國の人かれバ 勇のみあつて信あれど
 其船將の壓抑を 深く怨みて措るぞとよ
 將が性質猛くして 慈愛の心露ほども
 無さのみからせ針ほどの 罪も嚴しく糺し問ひ
 免れこと無し斯て世ハ 將が暴威ハいやつのり

船人ども的心中ハ 燃る怒のそのほの
 消るひまなくあつて せりさへあつて燃え出で
 人をも身ををもゝ強共ハ 焼りんとすかり然れども
 船將常ハ望むらく いつか勲功あつて
 わが船の名を轟かし 古今未曾有の英雄と
 千萬人ハ呼ばれんと 一途ハこゝ強傾けて
 湊ハ過り岡ハ沿ハ 岬を廻り島を歴て
 北ハ南ハ何處とかく 残るくまなくたゞ渡り
 大海原の真中ハて 北をはるか眺むきハ
 帆を打揚げて來る船ハ 是ぞ正しく佛蘭西の
 軍の船ハまぎれなき わが船將の面色ハ
 喜び外ハあらわれ 言葉もいとゞいそがし
 船人どもゝ銘々の 心ハたくみありければ

眼の中はおのづから
將の聲色高らりあ
一と號令を下れまゝ
敵はまぢかく進みゆく
常ふ怨みと大將を
大砲はなつもののかし
實はいかつちの落ると
天地も破裂するはあり
帆架もわれてこそ微塵
銃丸繁くふりきたり
甲板のみか帆柱も
生きとし生けるもの共
この言ふこともりなれば

喜ぶ色の見えたりと
ものども船を追ふべしと
風はまかせて我船を
あゝあ乗組一同は
あゝみて腕を又きて
されど敵の大砲は
轟きわゆるおそろしき
横木も折れて波は落ち
甲板裂けて容おかく
雨りあられば怖ろしや
人の脳やと血汐やら
右あ左はうち倒れ
倒れしまゝ顔と顔

見合は姿凄まじく
絶えんとしつゝ船將と
嘲り笑ふ氣色あり
頼みし人もことごとく
われと賣りし口惜き
辱と志のせりあひあ
齒りみをかして叫べども
かばねの上あ倒れけり
實は怖るべし悪むべし
失ひしこそはかなけれ
經ぬといへど船將や
水屑とかりく海底あ
さりとも見えぬ波の上あ

血汐の中は玉の緒の
見りへる眼おのづから
將の功名立てんとて
我を嘲りよらみつゝ
心のうちと堪へられぬ
顔色青く赤くあり
終は痛手の疵おひて
嗚呼壓制よ嗚呼暴威
數多の勇士いたづらあ
其のち多く年月と
船人どものありねん
今も沈みて残るらん
浮べる鵜二三四

西洋よての戦の時慷慨激烈なる歌を謠ひて士氣を勵ま
すとあり即ち佛人の革命の時「マルセイエーズ」と云へる
最と激烈なる歌を謠ひて進撃し普佛戦争の時普人の「ウ
オツナメン、オン、ゼ、ライン」と云へる歌を謠ひて愛國心を
勵ませし如き皆此類かり左の抜刀隊の詩の即ち此例よ
倣ひたるものなり

抜刀隊

山仙士

我の官軍我敵の天地容れざる朝敵ぞ
敵の大將たる者の古今無雙の英雄で
之よ從ふ兵の共お慄悍決死の士
鬼神よ恥ぬ勇あるも天の許さぬ叛逆と
起し、者、の昔より榮えし例あらざるぞ

敵の亡ぶる夫迄の進めや進め諸共お
玉ちる劔抜き連れて死ぬる覺悟で進むべし

皇國の風と武士の其身を護る靈の
維新このかた廢れたる日本刀の今更お
又世よ出づる身の譽敵も身方も諸共お
刃の下よ死ぬべきぞ大和魂ある者の
死ぬべき時今あるぞ人よ後れて恥かくな
敵の亡ぶる夫迄の進めや進め諸共お
玉ちる劔抜き連れて死ぬる覺悟で進むべし

前を望めば劔あり右も左りも皆劔
劔の山よ登らん、未來の事と聞きつるお

此世よ於てまのあたを
我身のあせる罪業を
賊を征伐するが爲
敵の亡ぶる夫迄の
玉ちる劔抜き連れて
此世よ於てまのあたを
滅せ爲よあふたして
劔の山もなんのその
進めや進め諸共あ
死ぬる覺悟で進むべし

劔の光ひらめく
四方あ打出を砲聲の
敵の刃あ伏せ者や
絶えて墓なく失せる身の
其血の流れて川をなす
敵の亡ぶる夫迄の
玉ちる劔抜き連れて
雲間よ見ゆる稻妻か
天よ轟く雷か
丸よ碎けて玉の緒の
屍の積みて山をあし
死地よ入るのも君が爲
進めや進め諸共あ
死ぬる覺悟で進むべし

彈丸雨飛の間よも
進む我身の野嵐あ
墓あき最後とぐるとも
死て甲斐あるものか
我と思ん人たちの
敵の亡ぶる夫迄の
玉ちる劔抜き連れて
二ツあき身を惜まぬ
吹かれて消ゆる白露の
忠義の爲よ死ぬる身の
死ぬるも更よ怨なく
一步も後へ引くあかれ
進めや進め諸共あ
死ぬる覺悟で進むべし

我今茲よ死ん身の
捨つべきもの命なり
忠義の爲よ捨る身の
承く傳へて殘るらん
義もなき犬と云はるゝ
君の爲あり國の爲
假令ひ屍の朽ちぬとも
名は芳しく後の世よ
武士と生れた甲斐をか
卑法者とあそはられそ

敵の亡ぶる夫迄の進めや進め諸共お
玉ちる剣抜き連れて死ぬる覺悟で進むべし

勸學の歌

尙今居士

昔と唐土の朱文公よと博學の大人おがら
わが學問をすゝめんと少年易老の詩を作り
一生涯の春の夜の夢の如くと嘆きけり
國の東西世の古今人の高卑を問はせしめて
學の道は就くものはいふは才能ありとても
同じ多少の感慨を起さぬことのあるべしや
春の初花秋の月夏のみどり葉冬の雪
渾て此世の物事お心をとむる時あはらば
わが學藝を省みて過る月日を思ふべし

池のみぎりの春草のみトかき夢も覺ぬまゝ
吹く秋風にさそわれて
此年も半ば過ぬると
ふみ讀む人のちらせやの

年の月日の長けれど
難波入江の村あらしの
ひとよの如く思はれて
わが身の上のはづかしさ
螢や雪の光りあて
ふみの讀めども業からせ

昔の人の學問の
唯一をぢれ道かれど
かほ賢人の嘆きあを
今の學術多端あて
枝は小枝あ末葉まで
いろで凡夫の能をべき

さゝり云ふもの、諺あ
山のはとめの一塊土

海のはとめひとしづく
いかあ急けど詮のかと
心をこめていつまでも
怠らぬこそよありけれ

たとひ多くはわたらぬも
唯一藝を修めかバ
身の爲とある多りふん
蜘蛛は藝あり網をはり
蜂の能あり蜜つくる
何とて蟲は及ばざる

勉め勉めよたゆみなく
進み進めよよどみなく
難き事とて厭ふなよ
學の海あ舟路あり
教の山は志をそあり
丈夫何かの怯るべき

山仙士

無常を告ぐる人相の
 鐘の音をるたそがれあ
 三人の漁夫の帆を上げて
 入る日を指し西の海は
 走らば船の進めども
 妻子の爲は引かざる
 心の 中 の 皆 同ト
 父の出船を眺めつゝ
 おきよ向ひてイめる
 童子の外は餘念を
 まうけの薄く子澤山
 雨の降る日も風の夜も
 洲は打掛くる浪音の
 最とすさまじき其時も
 かせがよやあふぬ男の身
 袖のひぬのの女子の身

三人の漁夫と妻三人
 日も西山は入相の
 鐘も不のかあ聞ゆれり
 共は籠りと燈臺の

火を挑んと立寄りて
 つまめる心の夫思ひ
 窓の戸開けて眺むれば
 驟雨やと暴風やら
 空打過ぐるむら雲の
 色黒くと物をこ
 暴風の如何は吹けばとて
 氷のさの如何あ増せばとて
 洲は打掛くる浪音の
 如何程をおく聞けばとて
 あせがよやあふぬ男の身
 袖のひぬのの女子の身

朝日かゝやく砂磯あ
 潮引き去りて其跡あ
 残るの三つの屍ぞ
 三人の漁夫の妻三人
 歸らぬ旅は門出して
 歸らぬ夫のなきがらあ
 髪振り亂れ取りがら
 消る斗あ啼き入て
 目もあてられぬ風情をり
 かせがよやあふぬ男の身
 袖のひぬのの女子の身
 一日も早く世を去れば

一日も早く樂をせん
屍の跡の砂礫あ
寄せ來る浪のくだけつゝ
鳴りたきや鳴れよゑゝ儘よ

西洋諸邦ハ勿論凡ソ地球上ノ人民其平常用フル所ノ言語ヲ以テ詩歌ヲ作ルヤ皆心ニ感スル所ヲ直ニ表ハスニアラザルナシ我日本ニ於テハ往古ハ此ノ如クナリト雖モ方今ノ學者ハ詩ヲ賦スレバ漢語ヲ用ヒ歌ヲ作レハ古語ヲ援キ平常ノ言語ハ鄙ト爲シ俗ト稱シテ之ヲ採ラズ是レ豈謬見ト爲サザルヲ得ンヤ
夫レ我邦人ノ漢學ヲ修ムルヤ殆ト皆ナ所謂變則ナルモノニシテ漢土ノ本音ヲ以テ其文ヲ讀下スルモノ甚少ナリ然シテ韻書作例等ニ因テ平仄韻字ヲ學知スルモ之ヲ用ヒテ詩ヲ作ルニ當テハ既ニ本音ヲ發スルニ非ザレバ到底室内ニ游泳ヲ試ムルガ如クニシテ隔靴ノ憾ナキ能ハズ何トナレバ凡ソ詩歌ハ意義ノ優美奇巧ナルハ素ヨリ望ム所ナレモ音調ノ宜シキヲ得ルヲ亦極メテ肝要ナ

レバナリ而シテ音調ナルモノハ自國ノ語又ハ他國ノ語
ナレバ其音聲ヲ曉熟スルニ非ザレバ其眞趣ヲ翫味スル
能ハザルヤ明ケシタトヘハ變則流ノ洋學書生ガ辭書ニ
據リ作例ニ從テ音聲ノ強弱ヲ學ビ詩ヲ賦スガ如シ誰カ
其迂ヲ笑ハザラン又古言雅言ヲ以テ長歌短歌ヲ作り並
フルモ吾人常ニ用ヒザル所ナレバ稍外國語ニ類スルガ
故ニ之ヲ以テ精密ニ我衷情ヲ據ベ我思想ヲ揆スコト或
ハ難カラシ

果シテ然ラバ余以爲ク宜ク平常ノ語ヲ少シク折衷シ以
テ稍新体ノ詩歌ヲ作り充分ニ吾人ノ心ニ感スル所ヲ吐
露スベキナリ然レモ之ヲ言フモ爲サレバ人或ハ目シ
テ妄誕漫言ノ徒ト爲サン故ニ余謝劣ヲ願ズ頃者試ニ西
洋ノ詩數首ヲ譯シ既ニ其一二ヲ新聞雜誌ニ載セシマ
リ今復此新紙ノ餘白ヲ借テ拙作二首ヲ掲ゲ江湖諸彦ノ
一粲ニ供ス其一ハ自作ニ係リ(但シ始ノ一節ハ大佛財法
日課勸進之序ヲ取捨シテ作レルナリ)其一ハ西詩ノ譯ニ
係ル余素ヨリ文事ニ疏ク詞藻ニ精シカラス江湖諸彦ノ
幸ニ我微意ヲ諒察アラシテ乞フ

尙今居士識

鎌倉の大佛お詣で、感あり

今をさることゝふれり 六百年の其むかひ
建長のころ 鎌倉お 稲多野局が建られし
總請銅の大佛の 御身のたけり五丈まで
相好いとゞ圓滿し 見者無厭の尊容の
何れの地よも比類あり さるゝ明應四年とや

由井のつかみの難およそ
紫磨金仙も雨よ濡れ
殆ど此よ四百年
大殿破壊の其後の
風お暴されたまふこと
このこれ人は聞くとこる

余もこのころ鎌倉の
杖を引きつゝ大佛お
しかと尊顔見上れば
淨き如來の御心は
涅槃てふ語の思はれて
いばこの間脚の雲
眞如の月の圓かかる
見ぬるが如き心地せり
古跡尋ねてをちこちと
詣じ、心れちつけ
はちすの花もおよびあき
外は見られ何となく
凡夫不覺の余とくも
霽れて無明の夢醒め
影を見たるよあらねども

夫れ物事のかりぬちの
昔と羅馬の帝國の
起りしものよあらむおし
家康ひとを徳ありと
時勢人情やうやくお
鎌倉山の 大佛も
千百年を過ぎし後
鑄もの、術も具はりて
頼みと、のふことぞなき
シーザルひとり智を奮ひ
徳川氏の繁昌の
成りしものとお思ひそよ
運びて此よ至りてき
浮屠氏の教へ渡り來て
人の信仰厚くかり
初めてありしものおらん

稲多野夫人の時代よ
精神こめく手を合せ
わが後生とと祈りしを
生れし人の然らせむ
此大佛お打向ひ
天下太平安穩と
今の明治の聖代お
佛の面を打眺め

昔の事を思ひやり
其鑄工の巧みある
業をほむるの外にか
かればあはる時勢かな
秋の空はも劣るまど

昔の人の是といひし
事も今じの非とぞある
今日の眞のあはれの偽
あすの教のあさつきの
非理邪道とやかるならん
天地萬物一定の
規律よりて進化はと
學者の謂へど是を之れ
聡と心は認めたる
人の果してあはるらん

嗚呼盛んかる太佛よ
六百年もたつた川
からくれかるのもみお葉と
流るゝ水を年々あ
人の譽むるは異からん
尊体此處は在まは間

如何は時勢の變るとも
年々人の尋ね來て
歎賞せざることをかけん

此篇の高僧ウルゼー初め王の寵愛を得て大權を握り威を海内お振ひ其富王室は劣らざるに至りしも忽ち王の意は戻り官職を奪ひれ所有を没收せられたる時世運の定まりかきを嘆息れる所にして頗る有名の作あり

山仙士

おさらばさらばいささらば 再び會ひぬ暇乞ひ
榮譽は永く別るべし 人の習ひ 皆都て
利運の端の芽出しおバ 八重咲きはほふ花盛り
位は位重かりて 榮耀榮華を極むれば
愚か脚は思ふ様 運命強く願かおひ
天はも登る龍かりと 悦びいさむをるかさよ
冬や、深く置く霜の 情け用捨も荒野原

根までを枯らば霜枯は 運極ひまりて身の墮落
見るも慙れお有様は 我が今日の身の上
永の年月心をかく 名譽の海は浮べるは
浮袋はてうかくと 遊ぶ童子は異からぬ
丈の立たざる淵は入り 飽まで強き我が意地も
こらへをふせを張り裂けて 勞れはてたる精神は
忠を盡して年寄れる 其の甲斐もかく今んとや
身の零落は涙川 水屑とこそ成るべけれ
浮世の虚飾や譽れ程 忌むべき物のあらぬかし
今に至りて我が脚は 初めて悟る所あり
廣き世界の其内で 王者の機嫌取り取りは
此世を渡る男ほど 憐むべきは無きぞかし
願ふ所の其笑顔 恐るゝ所の其不興

彼と是との氣がねして 憂さ恐怖さの數々の
軍はるより尙ほ多し 女子の機嫌取るよ増は
遂よ零落はる時ハ 天より落るルシフアあり
再び浮ぶ潮ハあらむ

シャルルドレアン氏春の詩 尙今居士

春の景色のどけさを いかで好まぬ人あらん
冬ハ物事さびしきも 春ハ心のをのづから
とけて樂み限りあむ 雪もみどきもふる雨も
人をかやまはことづかさ のどけき春の來る時ハ

北風強く吹く冬ハ 野邊よハ深雪木ハつらハ
雨もこほりていと寒く 障子ふはまを建廻ハし
爐火近く團居して ねぐらの鳥よことあらむ
されど嵐も雪も歌む のどけき春の來る時ハ
曇りがちなる冬の空 日影もろはく晝くらし

さきと春よもなりぬれば
光りのとけき天を見る
跡も残らば消えうせぬ

喜ばしくも雲のれて
いおせく降りし雪霜の
のとけき春の來る時の

社會學の原理を題す

山仙士

宇宙の事、彼此の別を論ぜば、諸共、
規律の無き、あらぬか、
微か、見ゆる星とて、
云へる力のある故、
又定まれる法ありて、
且つ天体の歴廻れる
必き定まりあるものぞ、
地震の如く、亂暴、
一、定まれる法あり、
地を、ふ虫や四足や、
其組織より動作まで、

天、懸れる日月や、
動く、共、引力と、
其、引力の働、
猥り、引けるものから、
行道とて、同ト、
又、雨、風、や、雷、
外面、見ゆるもの、
野山、生ふる、草木、
空、翔けり、ゆく、鳥類、
都て、規律のあるものぞ、

又萬物の皆共あり
 深き由來と變遷の
 あらざる物のあきぞかし
 鳥けだものや草木の
 別を論ぜず諸共あり
 親お備はる性質の
 遺傳の法で子に傳へ
 適はるもの榮えゆき
 桔梗かるかや女郎花
 今の世界に在るもの
 牡丹お縁の唐獅や
 梅や櫻や萩牡丹
 木の間轉る鶯や
 菜の葉に止まる蝶てふや
 雲居に名のる杜鵑
 門邊にあさる知更鳥や
 友を慕ひて奥山に
 同じ友をば呼子鳥
 譯も分らで貝の音に
 追はれてあゆむ牛羊
 羊に近き猿はまだ
 愚かきよ萬物の
 靈とも云へる人とても
 今の體も腦力も

元を質せさ一様は
 一代増お少しづつ、
 積みかさされる結果ぞと
 今古無双の濶眼で
 見極めたるのこれぞこれ
 アリストートル、ニウトンよ
 優れも劣らぬ腦力の
 ダルウヰン氏の發明ぞ
 これお劣らぬスペンセル
 同ト道理を擴張し
 化醇の法で進むの
 まのあたりみる草木や
 動物而已おあらせして
 凡ろありとしあるもの
 活物死物夫而已か
 有形無形夫くの
 區別も更おわかりを
 眞理極めし其知識
 感ぜるも尙あまりあり
 されば心の働も
 思想智識の發達も
 言語宗旨の改良も
 社會の事も皆都て
 同ト理合のものかれば
 既おものせる哲學の
 原理の論ぞ之お次ぐ

生物學の原理やら
士臺とを以て今更
書おものさるゝ最中
そも社會とい何ものぞ
其結構お作用お
種族と親と其子等の
男女の中の交際や
取扱の異同や
違ひの起る原因や
其變遷の原因や
智識美術や道德の
遷り變りて化醇する
論述おして三卷の

心理の學の原理を
社會の學の原理を
此書お載せて説かるゝ
其發達の如何なるぞ
社會の種類如何なるや
利害の異同如何なるや
女子お子供の有様や
種々お政府の違ひや
僧侶社會のある故や
儀式工業國言葉
時と場所との異同お
其有様を詳細お
長さ文おぞせらるべき

最とも目出度き美學おこそ
讀ある者の誰ありて
實お珍敷しき良書あり
何あら何とせのをやく
走り書きやらららとやべり
天下の事の一と飲みと
新聞記者や演説家
人をあやまる罪とがの
月日の事や星の事
夫等の事おさて置きて
疊一枚させおとして
長の年月年季入れ
出来る事おあらざるお

既お出てたる一卷を
此書を褒めぬ者ぞおき
社會の事お手を出して
責任重き役人や
舌も廻らぬくせおして
法螺吹き立てゝ利口おる
此書を読みて思慮おさば
少しお減りもゆるからん
動植物や金屬や
凡る天下の事業の
足袋を一足縫へおとして
寐る眼も寐お習おねば
獨り社會の事計り

年季も入らぬ學問も
新聞記者や役人と
か様か者が多ければ
尙ほ恐ろしき虚無黨の
揉めお揉めたる其上句
秩序も建たぬ自由なく
再び浪風静まりて
百年足らぬ掛らん
有様見ても知れたと
妄ふ手出しぬる勿れ
廣き世界の其中お
盲目同士の戦ふ
規ひさまさぬ棒打の

なるお及ばぬ譯かれを
成るの最と最と易けれど
忽ち國お社會黨
起るの鏡お見る如し
此蜂取らぬの丸潰れ
泥海おころがるべけれ
大平海と成る迄の
革命以後の佛蘭西の
ろこお心が付きたらば
妄お忘やべると勿れ
恐るべきもの多けれど
越したるものあらぬか
仲間入りこそあやふけれ

今の世界の旋風
烈しき中へついで一寸
足も据わらぬ眩暈さ
ぐるくくと廻りされて
上句のにて空中へ
初て悟る其時の
後悔先きよ立ぬあり
其吹く中へ過ちて
上手どころに云ふべけれ
輿論を誘ふ人たちの
能く慎みて軽卒よ

烈しく旋る時あるぞ
絡き込まれたら運の盡
頭にいとぐら付きて
そき間もあらぬ廻りされて
絡き上げられて落されて
早運時の辣椒
颶風烈しく吹く時の
船を入れぬが楫取の
政府の楫を取る者や
社會學をば勉強し
働ぬやう願ひしや

來れわらへべかたならよ
 汝が遊ぶさま見れば
 我等が多年苦みて
 かほとけさりと疑ひ
 忽ち解けて露ほどの
 曇りも胸よ止まらぬ

汝が遊びたゝるゝを
 見るゝ恰も東ある
 窓打あけて日よ向ひ
 さにづる鳥の聲聞て
 清く流るゝ川水に
 臨むが如き心地せり

流るゝ水も鳥のねも
 照らけあさひも汝等の
 心の如くゆたかあり
 されど我等の心中の
 かあらしさ秋も過去りて
 寒き雪霜ふりよけり

わらへべ無くは世の中
 如何よ苦しきことあらん
 わらへべ無くをわれゝ
 後ふりむくも憂さをかり
 前を望むもうべたまの
 闇の夜中よ異あらぬ

知らぬや茂る森の木
 いと美のしきみどり葉よ
 清き空氣や日の光
 其作用を施して
 善き汁液を造り成し
 幹と枝とを養ふを

知れよのどけき氣候を
 うけて早くも感ぜるゝ
 幹よのあらじ軟かき
 緑の葉よぞありぬるを
 森を此世よたとふれば
 葉のわらへべよ比ぶべし

來れもぐりべかたのぐよ
花よ戯れ啼く鳥も
何如かる事を告るやを
のどけき天を吹く風も
汝が清きこゝろよの
我耳近くさゝやけよ

思慮をめぐらし智を竭し
我等が書けるふみとても
汝が面の樂しさよ
我等が成せるわざとても
汝が様のあそゆさよ
比ぶることのあるべきや

人の賞をる詩や歌の
完全無虧の汝等よ
汝の生ける詩歌あり
世よ數多くあるかれど
及ぶべきものあらざかし
他の皆死よし言葉のみ

シーキスビール氏ヘンリー第四世中の一段

ヘンリー第四世其初
一旦謀叛企て、
リチャルド王と戦ひて
自々立て王と成り
天のいかでの亂臣を
禍亂交も起り立ち
ウエールス人の蜂起せり
ベルセー一家叛逆を
其數最とも多かりき
王よ烈しく抵抗す
王の人望失ひて
ランカストルのデウクたり
六萬人の將として
王を俘よかしたれば
四方よ逆威を震ひしも
安穩よての置くべきや
戦争止む時更よかく
スコット人の攻め入れり
王を暗殺謀る者
議院の権理打ち守り
財政最とも困難し
健康漸く衰へて

其晩年お至りて
心で心責められて
なまをたかぬ苦しさを
其有様をうつしたる
廣き世界の其中お
ヘンリー四世ならざるハ

自ら悔ゆる其惡事
安眠とてハ片時も
此一篇ハこれぞこれ
シエキスピーヤの名作ぞ
王者の數ハ多けれど
幾人ありや聞かまほし

山仙士

最と下賤なる我人の
今しも眠る其數ハ
あゝ美し美し
天より我お賜はりて
如何なる罪の祟よや

枕を高く高いびき
幾千萬かあるおらん
眠の神よ眠り神
御をるところを云ふべけれ
眠の神よ見ハかされ

假令へ暫時の間お共
瞼を閉ぢて眠らんと
そも如何おれば眠神
くまぼりかへる稿の床
心地もよげよ横たなり
飛びくる虫の羽音さへ
すやく眠むるものおるよ
床の上おる天蓋ハ
眠を誘ふ樂の音ハ
貴人高位の寢屋までハ
實よ愚かる神ぢらし
不潔を床よ横たなる
王者の床よ來らぬぞ

脚の苦しさを忘れたさ
如何ハすれども眠られぬ
見る影もあさはか家の
むさ苦しきも厭ハぬ
枕のほとりおんくと
眠りを誘ふ助よて
伽羅沈香を炷き立てハ
金襴緞子以て作り
最と心地よく聞ゆある
何とて來るそのあさ
何故よかく見苦しき
下賤を者と寝ハするも
金の時計と號鐘と

比べものよのからぬのを
 えていぶかじき神の意ぞ
 ゆらくゆるゝ帆柱の
 高き上よも安く寝る
 水夫の目をば閉ぢさして
 情け用捨も荒浪や
 吹き来る嵐凄しく
 うを巻く浪を巻き上げて
 天地とゞろく浪音の
 死人も覺むる程あるよ
 下へ無間の地獄ある
 高き柱の其上へ
 浪よゆづめも眠らざる
 神の力ぞ不思議ある
 惣身水よひたされて
 身を粉よ碎く水夫よの
 斯く暇しき其折も
 眠の神の付き添ふよ
 草木も眠る牛三よ
 眠を誘ふ其工風
 手を替へ品を替ゆるとも
 王者の傍よ來らぬの
 依怙最負ある神よこそ
 あゝ幸多き賤の身の
 寝ろや眠れや羨し
 熟し思ひ合はれば

冠著たる頭程

苦しきもの世ああらト

あがらふべきか但し又
爰が思案のしどころぞ
これお堪ふるが、丈夫り
深き遺恨、手向ふて
とふも心お落ちぬる
眠ると同じ眠る間
あらゆるうきめ打捨つる
ア、しぬ、ねむる、ねむる時
ハアこだわりが有るやうぢや
無常の風おさるゝれて

あがらふべきは非る可
運命いゝつたおきも
又さゝあがで海よりも
之を晴らすがものゝふか
叔も死あんか死ぬるの
心痛のみか肉體の
是ぞ望のゝてならん
万が一ゆめみるあがバ
かぜと曰ふは死は眠り
此娑婆離れしまふとも

いかかる夢のきたるやら
うき事長く忍ぶのも
九寸五分さへ持ちたれば
事をまをもやせけれと
强者の非道、世のろじり
想ふ美人の不深切
貴人の無禮又たとひ
輕しめらるゝ、是を之れ
重荷を負ひて汗流し
暮せぬ暮し暮れのも
死後の恐れがあるらぢや
登りて歸る人ぞあき
物にごくころ思はるれ

ハテ疑の晴れぬもの
これが爲めかあ、かぜおれば
其切先で一とつきあ
之とを爲さき慎みて
驕れる人のゝづかじめ
緩み過ぎたる國の法
いゝ善しとも下人の
堪へ忍ぶのゝ何故ぞ
ういめつらい目くらへつゝ
亦何故ぞ是ゝみあ
死出の山路の不思議ある
如何ある事のあるやらん
たとひ此世は止まりて

うきかんかんを嘗るとも
斯くと心よ思ふ故
如何なる深き大望も
實のかることぞかかりける
ア、たをやかか其風情
わらが罪障わびてたべ

あの世の事の恐らや
たけき心も弱くあり
花を開かば枯れ失せて
左のさりあがらオロリヤよ
そあたは神をいのるあ

シェーキスピアル氏ハムレット中の一役

山仙士

死ぬるが増る生くるが増か
つたかき運の情なく
堪へ忍ぶが男兒ぞよ
一そのことお二つあき
死んで眠りてそれぎりと
さらりと去つて消え行くも
一眠りにてつもりこと
萬の艱苦ろれぎりあ
ろれよまされることあきも
眠りて後お又や見ん
死んで眠りの肉身を
思案をそるへこ、ぞら
うきめからきめ重かるも
又もおもへばさああらで
露の玉の緒うちきりて
あらさくるしき世の中と
卑怯の業よあらぬや
胸の焦れや現身の
去りて去らるゝものならば
死ぬる眠ると云ふものゝ
夢の行末おぼつかな
離れぬ離れ行くものゝ

如何かる夢を見ることぞ
無情き世にかがたへて
もといと云へばのちの世の
人の非道や下をみや
公事訟の永引や
堪へ忍ぶ何故ぞ
一本あれば何のその
あたし命をかがたへて
うんそと云ん馬鹿になし
此世の憂目堪ふるも
方角さへに誰知らぬ
飛んで火よ入る夏虫の
逢ふのがいやさ恐ろしや

人の迷ふもことわりよ
憂い目つらい目堪ふるも
夢を恐るゝ故ぞあし
叶へぬ戀の悲みや
役人づらの權柄と
かまくだ刃金鑢刀
極樂往生出來ふなら
重荷を擔て汗みづく
死かんとしつても死お兼ねて
十万億土と云へを
人の歸らぬ國へ行き
虫も知らさぬ恐怖い目お
世間の人の思案して

臆病神あさそはれて
思ひ企つ大謀も
もとを質せばこゝぞか
くり言をるも益あらや
おへりや殿よ辨天よ
祈て給へ我罪の

居へたる胸も小ゆるぎし
遂まはたさき水の泡
あゝ愚さよ我ががら
のうこれもうと美しの
後生のねがひする時の
亡ぶる様お頼むぞや

春夏秋冬

此詩ハ句尾ノ二字ヲ以テ二句ヅ、韻ヲ踏ミタルモ
ノナリ例ヘバ「よるこさ^さじ^じ暖^かじ^じ」如^レ

尙今居士

春ハ物事よ^ゆめこ^さじ^じ 吹ク風とイモ暖^あじ^じ
庭の櫻や桃のそ^か よ^に美^しく見^ゆる^りか
野邊の雲雀のいと高く 雲井はるか^は舞^ひて鳴^く

夏ハ木草の葉も茂^ま 百日紅も咲^きま^けり
夕暮かけて飛^ぶ蟲は 集^まり來^る軒のさ^ひ
人ハ我家を立^出で、 な^ほ涼^むらん^さよ^ふけて

秋ハ尾花^あを^みな^へじ 桔梗の花も開^くべ^じ
晴れ々雲かき青空^あ 照^られ月影明^かあ
されど何處も同^トこと 寂^しく見^ゆる家^の外

冬ハ雪霜いと深く 冷^ゆる手足を暖^く
かさん爲^とて爐火^あ 近^く團^居を^する時^は
風ハ吹き入る戸のあ^そい 外^の方^見れ^ば銀^世界

我國の昔よを言靈のさきいふ國といひ傳へて長きみと
さ歌は文あ妙ある人も代は少あらざ然るを今の文明の
御代はあたりて短歌は名ある人の彼是きこゆは長歌を
よみ文をく人のをさくきこえざるはいとあやしや海外
の國はよてい昔も今もうぬといへば長きをむねとして軍
陣あうたひ祭祀はうぬひ哀樂あうたひく此道は妙ある人
代はぬえと云同じ天地の間は生るゝ人のげぬさもある
るへき事ありあかのは此比大學に入て大人たちの西洋
の詩を我が言葉はうつせるを見て感慨あ堪へぬいのでそ
たれたるを起してゝる新代の風をうたひ出ばやさく此
道は妙ある人の出来たらぬあは實はことたまの幸いふ國
の手ぶをも著くはた海外の事も聞つたへてあどる彼の言
葉はうつさゝらん然る國の光ともあるへき事をさすや

るくいふものは水屋主人幹文

正誤

尚今居士序二葉表五行 「シーキスピール」ハ「シーキスピール」ノ誤

一葉裏一行 「嗟難」ハ「嗟歎」ノ誤

十八葉表十三行 人ノ字ノ上ニ「船」ノ字ヲ脱ス

二十一葉表十二行「卑法」ハ「卑怯」ノ誤

二十五葉表九行 「甚少ナリ」ハ「甚少ナシ」ノ誤

三十五葉裏一行 「むらハベ」ハ「わらハベ」ノ誤

四十葉表十三行 「眠り」の「ハ」眠りて「ノ」誤

明治十五年六月廿七日板權御願
同 年七月廿一日板權免許
同 年八月 出版

定價金三拾五錢

撰者 静岡縣士族 外山正一
牛込區津久戸前町廿八番地

撰者 東京府平民 矢田部良吉
麴町區富士見町四丁目拾壹番地

撰者兼 福岡縣平民 井上哲次郎
麴町區三番町四十八番地

出版人 東京府平民 丸家善七
日本橋通三丁目拾四番地

